

本庶佑先生ご祝辞(要旨)

設立 60 周年記念式典にお招きいただきまして、大変ありがとうございます。

わたくしは医学部に入学した当時、多くの医学生が悩む重大な決定を迫られました。

すなわち、臨床に行って患者さんに役立つ医師として生きるのか？

基礎研究を行って医学の新しい展開を追求するのか？

という選択です。

当時、わたくしは医師になることによって直接患者さんの役に立つ喜びも感じましたが、よくよく考えてみると、医学は分からないことだらけで、医師として本当にどれだけの患者さんの命を救うことができるのか？

むしろ治る患者は医師の手助けというよりも、医師が邪魔をしなければ、ちょっとサポートするだけで治っていくのではないかという疑問を持ちました。

一方、基礎的な研究を続けることによって、ひょっとすると現在治らないと言われている病を新たな治療法、あるいは薬の発見によって治すことができれば、何万人いや、何百万人という患者さんに役に立つのではないか？

その方がもっと大きな夢があるのではないかと考えるに至り、基礎研究を目指すことを決めました。

当時、京都大学医学部医科学第一講座の主任教授としてアメリカ国立衛生研究所(NIH)から帰国された林修先生が新しい講座を立ち上げ、米国の最先端の設備、人脈、そして最先端の技術を携えて、登場されました。

林修先生の教室で、何とか新しい世界を開けるのではないかという気持ちになり、医学部の学生時代から研究室に出入りさせていただきました。

研究をやる上で、わたくしが若い人にいつも伝えていることは、次の6つのCを大切にしてくださいということです。

好奇心 (Curiosity)

勇気 (Courage)

挑戦 (Challenge)

確信 (Confidence)

集中 (Concentration)

継続 (Continuation)

研究者は自分が何を知りたいのかと言う好奇心が無いと長続きしません。

しかし、好奇心の対象はしばしば難しい課題です。

難しい課題に挑戦するにはそれなりの勇気が必要です。

つまり勇気をもって挑戦をし続けるということが、好奇心を保ちつつ、なおかつ前へ進む道です。

これを続けることによって、革新、また集中して継続することが可能になります。

私自身、この6つのCを常に自分が保てるようにこれまで努力してまいりました。

東レ科学振興会にお世話になったのは、米国留学から東京大学に帰国した後、大阪大学の遺伝学教室の教授として招かれた時代でした。

当時、大阪大学医学部は中之島にあり、古い非常に戦前のかなりくたびれた建物でした。

この中で、わたくしは新たに教室を立ち上げるためにたくさんの資金が必要であるということを感じていました。

若い研究者が、東京大学の時代、そして大阪大学の着任後に続々と集まってきてくれたのですが、なんといっても大きな制約は研究資金でした。

そこで東レ科学振興会に応募したわけです。

この当時、私共は現在も続けている抗体の多様性を生み出す遺伝学的な仕組みについて研究をしていました。

幸いにもこの研究助成金を採択いただき、われわれはとても喜び、勇気百倍研究を追究することができました。

この時の研究題目「リンパ球分化の過程における抗体遺伝子再構成の分子機構」(東レ科学振興会のホームページに掲載)は、日本生化学会の推薦を受けて採択いただいたものです。

私たちは、東レ科学振興会から当時としてはまさに夢のような金額の研究助成金をいただき、大変研究が急速に進展する原動力となりました。

東レ科学技術研究助成は、理学、工学、農学、薬学、医学(ただし臨床医学の分野は含まない)という、広い分野から総額1億3000万円、1件3000万円程度までという応募要領です。

このような1件3000万円程度までという研究助成金は当時極めて稀であり、また今日でも稀です。

文部科学省の予算で配られる科研費の状況を見ますと、1件の平均配分額は一番大きなグループが500万円程度、ちょっと大きなものでも1000万円ということで、現在においても東レ科学振興会の研究助成金に比べて見劣りするものです。

私がかねがね申し上げますが、しっかりしたプロジェクトを遂行するためには、ひとつのプロジェクトに最低でも数千万円のお金を与えるべきです。

大きな仕事をしようと思えばそれなりの金額が必要です。

このように一つのまとまった研究助成金を優れた研究に投資するという東レ科学振興会の理念を、今後ともぜひ追求していただきたいと思っています。

私は米国から帰国して以来、ワクチンを投与することによって、どうして微生物やウイルスなどに対する長期にわたる免疫記憶が作られるのかという問題を研究してきました。

新型コロナウイルスも最低二回ワクチンを投与する、このことによって抗体の種類が変わり、またそのできる抗体が非常に強力な抗体になり、よく効くような抗体が作られます。そして、これが長く通ぎます。

なぜそういうことが起こるのかということを中心に、研究を進めてきました。

東レ科学振興会の研究助成金によって急速な展開を得られたことをきっかけに、ワクチンの作用メカニズムの本質について、今日までの長きにわたり研究を続けることができました。

ここに深く御礼を申し上げます。

ご静聴ありがとうございました。

以上